

月曜寸言

想えば、近三百年來の漢民族とロシア民族との出会い、きわめて摩擦の多いものであった。漢民族とロシア民族という

それぞれに強烈な個性をもった民族同士は、いくらイデオロギ―を同じにしたとしても、両者の民族的異質性が消去されてしまつたことなどはあり得まい。

こうした前提のうえで、話であるが、スターリン時代から現在にいたるソ連の変遷を見つめひるがえって今日の中国の諸問題を考へていると、中国も結局は三十年ぐらゐの時代差によつ

て、ソ連のたどつた道を歩むのではないかと懸われることが多い。そもそも中国革命は、ロシア革命からおよそ三十年のうちに起り、三十年に近いスターリン時代があつたのと同様に、三十年有餘の毛沢東時代がまも

の時代を迎えることになる。ただし、歴史はくりかえす」という保証はないし、中国の場合、今回の天安門事件を見るまでもなく、これまでもしばしば潜在的な毛沢東批判がおこなわれてきているのであるから、スタ

まもなく失脚ないし肅清され、ソ連でマレンコフが出てきたように文革派の本命・張春橋あたりが後継者になるのだが、それはまもなく毛沢東以後に期待をかけていた「走資派」ないしは実務派のリーダーにとつてかわられ、痛烈な毛沢東批判がおこなわれて、毛沢東独裁時代の罪

華国鋒とペリヤ

中嶋信雄

なく終焉しようとしている。このでんでゆくと、スターリン批判が起つたのはスターリン死後三年たつた一九五六年だつたから、もしもここ二、三年のうち

に毛沢東時代がおわるとすれば、一九八〇年代初頭に毛沢東批判が起り、中国はやがて非毛沢東

の時代を迎えることになる。ただし、歴史はくりかえす」と中国における華国鋒の抬頭を見ていると、それもまたスターリン時代末期のペリヤの抬頭に似ているように思われる。ペリヤがスターリンと同郷のグルジア人であつたように華国鋒は毛沢東と同郷の湖南省出身であり、

東と同郷の湖南省出身であり、ペリヤがソ連の秘密警察を一手に握つていたように華国鋒は中国の公安組織を握る公安相であり、華国鋒の年齢は定かでないがともに五〇代半ばであるらしいところまで同じである。だとすると、毛沢東死後、華国鋒は

(東京外語大助教授)